

まちの本棚は、石巻の中心街・アイトピア通りの一角、耽書房という本屋があった場所に作られた、本のあるコミュニティ・スペースだ。

2013年7月、東京から被災地に本を届ける活動をしていた一箱本送り隊が、石巻で復興支援活動していた石巻2.0と協力して、街にふたたびにぎわいを取り戻したいという思いを込めてオープンした。一箱本送り隊・隊員だった私は、オープン初日から2日間、まちの本棚で店番をすることになった。

初日はまさかの豪雨。通りを歩く人もまばらで、訪れたのは、「石巻日日新聞」の取材ぐら이었다。

翌日、雨も小降りになり、開店時間から人がぼつりぼつりと訪れるようになった。どうやらその多くは、「日日」の朝刊を読んで、「耽書房さんの跡に何かできたいよ」と、やって来た地元の方たちの方だった。

芳しい天然の木材でできたセルフビルドの本棚に並ぶ、一箱送り隊が心をこめてセレクトしたおよそ1,000冊の本。震災から2年あまり、記憶がまだ生々しかった私は、石巻に在る間は被災地に在るのだという緊張感が抜けず、奥に座って本棚を眺める地元の方たちを見ながら、本がせめてもの慰めになってくれればと、どこか祈るような気持ちだった。

しばらくしてあることに気づいた。スペース内を見回している彼らは、本を眺めているのではないということに。彼らが探しているのは、本ではなく、耽書房の面影だった。「このあたりに雑誌があったよね」「このあたりでいつも立ち読みしてたな」「奥にいつもおじさんがいたよね」というように。

震災よりもっと前、アイトピア通りが石巻でいちばんにぎやかだった昭和時代の耽書房が目の前に一瞬蘇った気がした。

懐かしい感覚に包まれながら、ここが本のある場所になってよかったと心から思った。石巻の街の記憶を、この場所がときどき呼び覚ましてくれるだろうから。耽書房を愛した街の人たちによって。